

## 第2回あゆ有効活用計画検討会議 議事概要

■開催日時：令和3年9月22日（水）14:00～16:00

■開催場所：高知県立高知城歴史博物館ホール

■出席委員：黒笹委員長、霜浦副委員長（web）、東委員、岡林委員、藤本委員、西脇委員、林委員、林田委員、堀岡委員（web）

■議事：

### （1）計画の具体的な取組内容について

- ・別添資料1に基づき事務局より説明

### （委員等からの主な意見）

#### ●知る・触れるー観光

- ・昨年から友釣り体験を旅行商品化。お客さんで一番多いのは友釣りに憧れていたけれどやる機会がなかった方。最初のおとり2尾は天然あゆをこちらで準備しており、釣れなくてもその2尾を持って帰る楽しみがある（西脇委員）
- ・体験の価値を考えたときに、狙ったものをちゃんと持って帰ることができるというのは大きい（黒笹委員長）
- ・西脇委員がやられている仁淀川以外の河川でこういった取組がされていないということは、体験の担い手、メンターの確保というところがポイントになる。このポイントについては、どこが主体となってやっていけばいいのかを考える必要がある（黒笹委員長）
- ・四万十川の場合、連合会も含めて漁協というものがあるので、友釣り体験ができる組織作りや友釣りの好きな人を組合の中から探して窓口にするというのもひとつの手ではないか（林委員）
- ・川遊び文化の継承の中にあゆの友釣りが入っているが、地元の子供たちに対してあゆの関心を高めることもやっていく必要があり、それには道具の問題があるので、使わなくなった竿をどこかにプールしておいて、それがいろいろなサービスで公共財として使える仕組みづくりをやると、いろいろな取組が前に進む（黒笹委員長）
- ・「川遊び」、「山遊び」といった自然体験オプションの企画立案、集客はできると思うが、それらのインストラクターとなる「地域のおんちゃん」を見つけるのが課題。また、安全性を確保するのも課題で、そういうことがあって企画が前に進んでいかないが、次の世代、またその次の世代に川で遊ぶ文化をつないでいくためにも、川遊びの体験メニュー作りをしていく必要がある。そのメニューは子供向けのものからある程度の年齢層までのそれぞれに合わせたメニューを作ることが重要（藤本委員）
- ・今回の会議をきっかけに、あゆだけでなくそれ以外の川の資源の体験もしやすくなる

のも一つの理想。これからはインバウンドが戻ってくるので、インバウンドの人は日本人以上に体験志向であるから、そういう準備もしておく必要がある。取組をしたい地区が出てきたときに、うまく県が応援に入れるようにしておくことが必要（黒笹委員長）

- ・旅行商品化のための環境作りについては、一から整備していくのは難しいので、とりあえず現在実施しているところと連携しながら始めてみて、その中で体験を通して実際にどういった整備がいるのかというのを知っていくというのが良いのではないかと。また、自然を活かした観光の場合、天候がつきものなので、荒天のときの代替プログラムを考えておく必要がある（岡林委員）
- ・高知は二次交通が弱いので、駐車場がないと観光に対応できないというのは明らか。この会議で色々な方針が出て、こういった物理的なことが整備されていないとうまく回っていかないので、トイレも含めて、都会から来る観光客のほうを向いた整備が進んでいかなければだめだと思う（黒笹委員長）
- ・リョーマの休日キャンペーンの推進委員会でも、食が前面に出るという形になっていたので、この中にあゆをしっかりと組み込んでいただくというのは必要。組み込んでいただくためには受け皿になる飲食やおみやげを作っていく必要がある（黒笹委員長）
- ・商品開発の一番の課題は HACCP。商品開発はできても、HACCP 対応の加工場でないと今はなかなか売り出しができない（林委員）
- ・高知市内の料亭ではないところで気軽にあゆが食べられる環境作り、どの河川にいてもあゆの塩焼きが食べられる仕組み作りというのが、あゆの振興にとって必要（林委員）
- ・あゆの塩焼きが戦略商品として使えるんだということを皆が実感できれば、じゃあうちもとなってくると思うので、「高知に行けば必ずあゆが食べられる」、「どこの観光パンフにもあゆの串焼きの写真が載っている」というような細かな仕掛けと、必ず食べられる場所を作っておくというのが必要（黒笹委員長）

### ●知る・触れる一食

- ・岐阜県では、長良川関係のホームページにオススメのあゆを食べられる店が紹介されているが、高知県ではそのような総合的な紹介がされていない。また、高知県のあゆは天然が多いと思うが、そういうことがPRされていない。それをまとめた形で県外に発信していけば、「高知県はあゆ」というイメージを持ってくれる人が増えると思う（岡林委員）
- ・あゆの総合ポータルみたいなものがネット上に自立してあると、結構な力になると思う。今回の検討会議の成果として、そういうものをひとつ作りませんかというのを、委員長から提案として入れておきたい（黒笹委員長）
- ・今回のような形で、今後、県をあげて体験も含めてやるのであれば、食に関しても、

高知県は天然のあゆで行くという流れを最初に作って欲しい（林委員）

- ・天然あゆを前面に出すのであれば、資源保全を抜きにして、この事業は成功しにくいだろうと思う。前回の会議でもあゆという魚はそもそも資源変動が大きいですよという話をしたが、決して資源の底上げが必要ではないという観点から申し上げたのではなくて、そのことを前提にしてこの事業に取り組まないと非常にリスクが大きいという意味で発言した（東委員）
- ・あゆの資源管理については危機感を持っている人たちもいるし、実際に回復力のしっかりあるうちに何か手当をしないといけないというのもまさにそのとおりだと思うので、その辺どこかで議論する場もできれば欲しいなと思う（黒笹委員長）
- ・他県と比べて高知県のあゆはどこが有利なのかを、しっかりメディアを活用しながらPRしていくというのは10年のノウハウもあつてできるところ。河川ごとに違う特性をもったあゆをどここのあゆといったところまで深掘りしながら、高知のあゆの良さをPRしていきたい（地産地消・外商課 山崎企画監）
- ・食育であゆを使うイメージとしては、水産流通課では食育推進事業委託業務という事業を実施しており、その中では毎年学校給食、学校の栄養教諭と連携して、身近にある鯖などを量販や鮮魚店の方に来ていただいて捌いてもらうことをやっており、その事業の一環としてあゆを使っていくというのが考えられる（水産流通課 西山課長）
- ・イベントであゆを販売すると子供たちはだだをこねてでもあゆを食べたがる。ぜひ県内の子どもたちにあゆを食べてもらいたい（林委員）

### ●知る・触れる一釣り

- ・あゆの友釣りを子どもたちに継承するために、子どもだけが夏休みの間自由にできる場所を作るというのは実際に仁淀川でもやったが、そういう漁協さんの努力でできる部分もある。安全な漁場の整備やイベントは漁協さんのやるところになると思う（黒笹委員長）
- ・幼稚園のつかみ取りといった子ども向けのイベントは中央漁協の管轄で毎年やっているが、かなり好評であるので、県内の各漁協がこういった取組をしてくれたらもっと広がると思う。他のところで広がっていかない理由としては、学校を巻き込まないと難しいということがある（堀岡委員）
- ・学校の1年間のカリキュラムは早くに決まってしまうため、企画ができたから来月やってくださいというのは難しいと思う。少し計画的に早めから相談することが必要。県の教育委員会から市町村の教育委員会に情報提供して、そこで具体的な話になっていくのではないかと（水産振興部 松村部長）

●売る－加工・流通・販売、●学ぶ－体験・教育、●その他－資源保全

※3項目あわせて意見交換

- ・事業の成否はあゆ資源の安定的な供給にあるので、資源保全がベースとなるが、もうひとつの要素として、中山間地域への経済波及効果がどれだけあがるかということだと思う。これなくして住民の方の協力は得られない。事業の目標は設定しづらいと思うが、資源と経済の両面での目標設定をするというのがこの事業の重要なポイント。目標設定というのを視野に入れて事業を組み立てていただきたい（東委員）
- ・全ての項目において、どうやって売り込むかという宣伝が重要。「高知に行けばあゆと会える」というようなPR、これにはデザインとメッセージ、どうやって発信していくのが大事。その際、高知県には15の河川があるので、地方自治体と各河川漁協が相互に協力して、それぞれの個性と魅力を発信していただきたい（東委員）
- ・資源保全については河川ごとに課題があって、問題解決していかなければならない。川ごとに目標を設定して、天然あゆをベースにするのであれば、毎年の遡上尾数をこれぐらいに引き上げたい、それであればこれぐらいの漁獲があげられるだろうというのが想定できる。そのためには調査研究が重要であり、四万十川の場合は流域自治体や漁協がやっているし、色々な川でやられているので、その成功例を県下に広めていくというのが必要（東委員）
- ・地域への経済波及効果ということだが、あゆを利用することで、そのあゆに関連する産業に、いかに経済効果を波及させていくかがひとつのポイント。また、そのためにはあゆ以外の食材でも地域の食材を使うことがポイントとなるが、少量の食材を調達するルートを探すのが難しいというのが課題（霜浦委員）
- ・なぜ、あゆの計画を作るのか、なぜ計画を作らなければいけないのか。その答えは、新しいことを始めよう、もうひとつは効果的にやりましょう、というため。目標を達成するために、効果的にやるために、計画を作りましょうということ。効果的にやるためにまずできることは、「誰かがやっていることを広げる」、「それぞれの取組をセットにする」、「情報を集めて作っていく」こと。それぞれがやっていることを既に集約して発信しているところに乗せていく、またはこちらで集約して出していくことが今回の計画のポイントとなる（岡村アドバイザー）
- ・あゆというのは日本人と長く深いつながりがあるため、教育と文化はひとつの柱になる（東委員）
- ・あゆだけにとどまらず、川の幸まるごとについて、高知の川にはたくさんの魅力があるというのを世界にアピールしていただきたい（東委員）

## (2) 計画の構成について

- ・別添資料2に基づき事務局より説明

### (委員等からの主な意見)

- ・この活用計画の中に、委員の皆様自身がこの部分は自分が汗をかいて取り組みますという項目があれば申告していただいて、ちょっとずつでもできる範囲のことを反映した計画を作成することで進めていきたいということを提案する（黒笹委員長）
- ・この会議の来年度以降の仕組みとしては、具体的な取組のPDCAを回していけるような、フォローアップの組織を立ち上げることが必要と考えている（事務局）